

# 継体王系と息長氏の伝承について

——総括および分析視点——

篠原 幸久

## 一 継体の出身をめぐる

『古事記』(以下、記と略)は武烈天皇の崩後の王権継承の様相を次の如く描く。

天皇既崩、無<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>日統<sub>一</sub>之王<sub>上</sub>。故、品太天皇五世之孫、袁本杵命、自<sub>二</sub>近淡海国<sub>一</sub>、令<sub>二</sub>上坐<sub>一</sub>而、合<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>手白髮命<sub>一</sub>、授<sub>二</sub>奉天下<sub>一</sub>也。ここにおいて仁德天皇以来の血流による王統が断絶し、畿外の近淡海(近江)国より品太(応神)天皇五世孫と伝える袁本杵(ヲホド)命が迎えられ大王位になったことになる。継体天皇である。一方、『日本書紀』(以下、紀と略)ではこの間の事情は詳しく、近江国高嶋郡三尾の別業に在った彦主人王が、三国の坂中井(越前国坂井郡)から振媛(垂仁天皇七世孫)を妃に迎え出生したのが継体であり、彼は父王の死後母方の高向で養育され、五十七歳のとき武烈の死去にもなつて、大連大伴金村らにより当地から大王として擁立されたこ

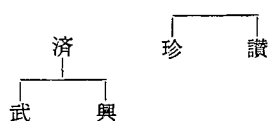
とを述べている。

しかし継体は王族とはされるものの応神からの血脈は遠く、また彼は紀によると河内の樟葉宮で即位以来、山背の筒城・弟国を経て二十年目(一説に七年目)にして大和に入り、磐余の玉穗に都を営んだと伝えるのである。

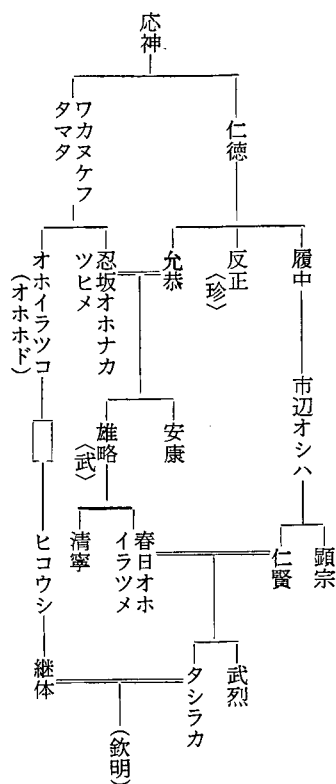
六世紀初頭期に生じたかかる異常にも映る王権継承のあり方から、継体を前王統とは全く血縁関係のない「地方豪族」より出身した新王朝の開祖であるとする諸見解は提起されることになる。<sup>1)</sup>

さて、継体の正体が「地方豪族」か「王族」かといった「王朝交替」をめぐる議論は、五世紀には既に男系世襲王制が形成されていたことを自明の前提としてきた訳であるが、しかしその前提はもはや否定されてよい段階に達しているよう。『宋書』夷蛮伝にみえる倭の五王<sup>2)</sup>「讃・珍・済・興・武」の系譜(第1図)において珍と済との間に血縁関係の記載がない事実は、五世紀において異系の王家が存在

第1図 『宋書』倭の五王系譜



第2図 応神・継体間の王統譜

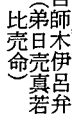


したこと、即ちこの時期にはいまだ世襲王権が成立していなかったこと(Ⅱ王族の「血統」の未確立)を示すものである。川口勝康氏が論じたように記紀に定着している応神以下継体までの王統譜(第2図)は、『宋書』に垣間みることができ二つの大王系譜及び継体の出自系譜を継体王統が一系的に統合したものであるとみられ、継体が五世紀に大王を輩出した二つの血縁集団とは別系の出身であることだけはほぼ確実にいいうるのである。

従来行なわれた継体の本質の推定については、近江説・越前説、そして陵(記―三嶋之藍御陵、紀―藍野陵の所在地の摂津とする説に大別されるが、なかでも継体の「出身氏族」は近江国坂田郡に盤踞した息長君(天武十三年十月、真人賜姓であろうとする岡田精司氏の見解が有力化し注目を集めてきた。岡田氏が一般的近江説を脱して特に息長氏をその出身母体と考えた理由は、(Ⅰ)息長氏は記紀の王統譜に「王」名の王族として位置付けられる一方、そこに反覆的

な伝承を定着させている。(Ⅱ)「河内王朝」の神話的始祖である神功皇后にオキナガタラシヒメの名を与え、舒明天皇の諡号にもオキナガタラシヒヒロヌカとそのウヂ名がみえる。(Ⅲ)記では継体の曾祖父意富富杼王に息長氏の「出自」が置かれ、その父若沼(野)毛二俣王が息長氏の血を引く。といったところが主要なものである。しかし近江国坂田郡の二大首長墓群(姉川流域・長浜垣籠古墳群―坂田酒人氏、天野川流域・息長古墳群―息長氏)の様相―造墓状況を検討した大橋信弥氏は、五世紀以前における坂田郡内の有力首長は坂田酒人氏こそ想定されるべきであると、元来坂田酒人氏との従属関係にあった息長氏が、坂田郡域で自立化し畿内勢力との直接的政治的関係に入ったのは六世紀以降であることを明快に論証しており、これら古墳群のあり方の歴史的理解及びその被葬者に関しては塚口義信氏に異論があるものの、大橋氏の断じた通り継体―息長氏の想定自体は先ず無理であろう。

第3図



おそらく継体は三島野古墳群とかかわる摂津在地勢力の首長であり、特に白石太郎氏が論じたように彼は淀川水系を媒介として山

く、極めて信憑性が低いと思われるのである。

紀にみえる彦主人王の近江国高嶋郡三尾の「別業」＝継体の出生地（その語義からいえば継体系の本貫を離れた一つの経営拠点であること以上の意味をもたない）と結び付けてよく、紀が後に継体が母方の越前で成長し、そこから大王に擁立されたと言くのは異なつて、記は簡略に「自<sub>(22)</sub>近淡海国、令<sub>(23)</sub>上坐<sub>(24)</sub>而」とその出身＝出生地を述べたものであらう。

## 二 息長氏伝承の定着

継体＝息長氏出自説には難点があるものの、継体妃（息長真手王の女。記＝麻組郎女、紀＝麻績娘子）及びその父系系譜（若沼毛二俣王系譜）に息長氏の姿がみえ、かつ息長氏伝承が極めて特異なあり方を王統譜上にとどめていることは注意されてよいであらう。息長氏を継体支持・擁立勢力とみる見解とてある訳であるが、しかし既に分析の方向は示されているように、息長氏が歴史的事実として王権の血脈と接触するに至つたのは敏達天皇と息長真手王の女広姫との婚姻時点であり、敏達と太后広姫の間に出生した押坂彦人大兄皇子が、その子田村皇子（舒明天皇の即位により新王統の始祖とされたことが息長氏伝承の敏達前代の王権史への介入の基盤なのである。大橋信弥氏が論じたように息長氏伝承の混入は、既に一定の形にまとめられていた系譜・物語を部分的に改変、架上すること成されている。<sup>(25)</sup>大橋氏はこの事実を息長氏の作為が極めて新しい時期（天武朝）であることの証左ともしているが、但しこれには若干の疑問がある。<sup>(26)</sup>

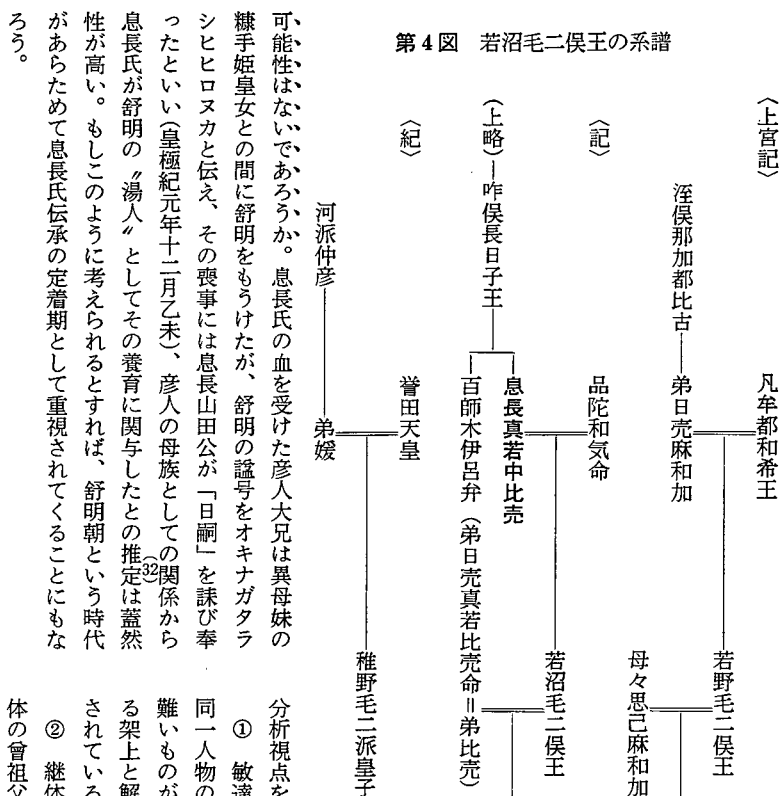
およそ息長氏伝承の特質としてあげられるのは、旧辞的部分に個

別的「氏人」（息長「某」王、息長「某」ヒメなど）の活動伝承が非常に少ないことである（これを史実化するところに息長氏の「陰の実力者説」は存在する）。神功皇后オキナガタラシヒメ物語こそあるが、神功伝説は周知のように複雑な構成要素を内包しており、その名と血縁系譜を除けば、明らかに息長氏系のそれとして摘出しうる要素は決して多くはないであらう。<sup>(27)</sup>息長氏伝承は次のような若沼毛二俣王の出自をめぐる「上官記」・記紀の系譜（第4図）の異同・異伝関係に端的に表出するように、素材に潤色を加えて系譜関係（息長人名を形成しつつも、一方、独自の物語的伝承を構成せず、旧来の物語的分子への介入も浅い「系譜先行型」ともいふべき定着をみせている。このように息長氏伝承の影響がまだ系譜部分を主体としてとどまっているのは、かかる伝承の混入が長期間に亘り持続的・重層的に行なわれたものではないことを示すものではあつても、息長氏の関与が記紀完成期に近い新しい時期であることの証左とは必ずしもならない。また大橋氏の如く天武系王統の顕彰とも関連して、記紀に直接に結実していく「天武朝修史」に息長氏の所伝が採用されたとみるならば、この第4図の系譜において、何故、記にみえた息長人名が紀の方には検出しえないのか、舒明朝（舒明・皇極朝）＝息長氏伝承定着画期説もいまだ軽視しえず、再検討の余地が依然残るものであらう。<sup>(28)</sup>

なお三品彰英氏は息長氏関係系譜の内に「湯人儀礼」の姿が検出されることを論じており、息長氏がかかる儀礼を職能とする氏族であつたことを説くのであるが、むしろその系譜の様態は息長氏の特

殊の職掌に基づくものではなく、息長氏伝承の定着状況に起因する

第4図 若沼毛二俣王の系譜



可能性はないであらうか。息長氏の血を受けた彦人大兄は異母妹の糠手姫皇女との間に舒明をもうけたが、舒明の諡号をオキナガタラシヒヒロヌカと伝え、その喪事には息長山田公が「日嗣」を誅び奉ったといふ(皇極紀元年十二月乙未、彦人の母族としての関係から息長氏が舒明の「湯人」としてその養育に関与したとの推定は蓋然性が高い。もしこのように考えられるとすれば、舒明朝という時代があらためて息長氏伝承の定着期として重視されてくることにもなるう。

### 三 継体系譜と息長氏伝承

以上をもふまえ、ここで継体と息長氏伝承の関係について若干の

分析視点を整理・提起して結びとしたい。

① 敏達太后と継体妃の両者に息長真手王の女がみえているが、同一人物の女が両大王と婚姻関係を結ぶことは史実としては容認し難いものがある。<sup>(33)</sup> 継体妃のそれは、敏達太后広姫の存在を基点とする架上で解すべきであるが、何故、継体妃を対象にかかる造作が成されているのであろうか。

② 継体の名は記紀に共通して、ホドを伝えるが、応神記では継体の曾祖父大郎子の「亦名」をオホホド(意富富杼)王としている。

ここには明らかに両者の対応関係が指示されているのであるが、「意富富杼王者、(三)国君、波多君、息長君、坂田君、酒人君、山道君、筑紫之米多君、布勢君等之祖也」<sup>(35)</sup>と記述されるように、何故、

かかる継体との対称名者に息長氏の「出自」が設定され、また意富富杼王の父で継体系の開祖たる若沼毛二俣王の母方が「息長氏」であるのか。

③ ②とも関連し、意富富杼王の同母妹で他王統たる允恭天皇の皇后となった忍坂大中姫が「初皇后随母在王家」（允恭紀二年二月）とあり、その妹の弟姫（衣通郎姫）が天皇のもとに召し出される際、「時弟姫随母、以在於近江坂田」（允恭紀七年十二月）とされるように、何故、姉妹が近江の坂田にいた人物として語られるのか。

④ 大王家内における息長系王統の始祖は、ヒコヒト大兄皇子であったが、継体はヒコフツ（彦太）尊なる「更名」を紀に載せており、そして同じくその父はヒコウシ（彦主人）王と呼ばれている。隅田八幡鏡に継体はフツ（季弟）王とみえており、「上宮記」逸文には継体父をウシ（汙斯）王とすることから、冠称ヒコは架上的要素と推定されるが、何故、これら冠称ヒコの潤色名がヒコヒトと同型を呈するのか。

これらはすべて一連の作為と考えるべきであろう。<sup>(39)</sup> 川口勝康氏は応神以降の三系統合系譜を核として描かれる王権史が、究極的に継体王系の登場を正当化し釈明する機能をもつことに注目したが、息長氏の伝承が継体及びその出自系譜に混入していることは、かかる王権史の基本的性格と不可分であるといえる。<sup>(41)</sup> 敏達王系と密着した疑似皇親氏族息長氏の伝承は既成の王権史の構成論理に沿う形で、<sup>(42)</sup> 継体系譜を週及していくことを許されたのである。逆に五世紀の二つの大王系譜を史実の核にもつ仁徳系の二王統（履中系・允恭系）に息長氏伝承がみえない理由もここに求められるであろう。<sup>(43)</sup>

## 註

(1) また応神・継体間の系譜の中間部分が記紀にみえていないとの論拠を以って、継体の応神後裔伝承を疑い、応神五世孫出自は五世王までを皇親とする律令皇親制からの潤色であるとする見解もかつて存在したが井上光貞『日本国家の起源』、継体の出自系譜の全容は現存しない紀の「系図一卷」（『続日本紀』養老四年五月癸酉）には記載されていたことは確実であり（藪田香融「日本書紀」の系図について）『日本古代財政史の研究』所収、藪田道「継体天皇の系譜について」「律令国家成立史の研究」所収、加えてこの継体系譜を伝える『新日本紀』所引「上宮記」逸文の成立が記紀の完成期を遡るものであることも決定的であって（横田健一「『記紀』の史料性」「日本書紀成立論序説」所収、志水正司「大和朝廷成立期の天皇について」「史学」三八一三、藪田道前掲論文及び同「継体天皇の系譜についての再考」）『律令国家成立史の研究』所収、客観的にみてこの論点は現段階にあっては完全なまでに克服されているといえよう。但しその応神・継体系譜が史実化できるかどうかはまた別問題であり、なお「上宮記」にみえる継体の祖「凡牟都和希王」を応神の名のホムタワケとは読みえないとし、それを記紀に垂仁天皇皇子として定着しているホムツワケに比定する説（吉井巖「ホムツワケ王」「天皇の系譜と神話」二所収）もあり、この意味で問題は派生・複雑化することになる。

(2) かかる「王朝交替」議論と男系世襲王権の問題については、山尾幸久 a『日本古代王権形成史論』三章、同 b『日本古代の国家形成』（『日本古代の国家形成』所収）に論及がある。

(3) 藤間生大「倭の五王」、原島礼二「倭の五王とその前後」、川口勝康「五世紀の大王と王統譜を探る」（『巨大古墳と倭の五王』所収、その他）。

(4) 蛇足ながら「世襲王権」の意味についてふれておきたい。筆者が世襲王権の未成立というのは、王位（王位）の継承が必ずしも特定の血縁集団内で行なわれなかったこと、王を輩出する血縁集団が一つに固定していなかったことを指している。大橋信弥氏の如く、「二つの大王家論を認めたとしても、

それぞれの大王位は、父から子へ、あるいは兄から弟へ、男系において継承されており、男系による世襲王制は確立していると考ええる（『日本古代国家の成立と息長氏』、一三二頁）と述べる研究者も存在するからである。

(5) 川口勝康前掲(3)論文。

(6) これら諸説については、鈴木増民『増補古代国家史研究の歩み』に要を得た近年までの整理があるので、それに譲りたいと思う。

(7) 「継体天皇の出自とその背景」（『日本史研究』一一八）。

(8) 前掲(4)書。大橋氏は長浜垣籠古墳群（坂田古墳群）が四世紀後半に造営が開始され、五世紀に盛期を迎えるのに対し、息長古墳群では五世紀後半代になって初めて「帆立貝式」の前方後円墳が築かれ、六世紀に入って盛期を迎えることなどを論拠として提示している。なお大橋氏にはこれ以前に「近江における息長氏の勢力について」（『日本史論叢』八）があり、同様の研究成果も示されているが、以下の大橋氏の研究の紹介はすべて前掲(4)書による。

(9) 「『新日本紀』所載の『上官記』一云」について（『堺女子短期大学紀要』一八）。かねてより五世紀における息長氏の大王家（若沼毛二俣王系王族）との血縁関係を認め、その勢力を評価していた塚口氏は、五世紀後半における息長古墳群の築造開始をこの時期以降に「息長氏の経済力が安定」していくことの証左とし、また長浜垣籠古墳群の被葬者は大橋氏の比定する坂田酒人氏ではなく、若沼毛二俣王系王族こそ推定されたいとしているが、その論証には従い難い。

(10) 但し古市古墳群と百舌鳥古墳群を各々、『宋書』からうかがわれる二つの倭王系の墳墓群に比定することはできないと考える（同様の立場をとるものとして川口勝康前掲(3)論文がある）。この意味で、白石太一郎 a「日本古墳文化論」（『講座日本歴史』一所収）、同 b「巨大古墳にみる大王権の推移」（直木孝次郎編『王権の争奪』（日本古代史 4）所収）、その他が論じているように、河内南部と和泉北部に各々本拠を置く「二つの王家が交互に大王を出すような状況」（白石前掲 a 論文、一七三頁）は否定しておきたい。古市

と百舌鳥の両者が「同一古墳群」としての様相を呈していることは指摘されており（森浩一「古墳」、中井正弘「百舌鳥古墳群」、『古市古墳群とその周辺』所収）、古市・百舌鳥の規則正しい大王墓交互移動については、それを単一墓域内での連続的大王墓造営にともなう地域的な経済疲弊を回避するための、王権による計画的措置であったと推測した石部正志・田中英夫・堀田啓一・宮川彦「古市・百舌鳥古墳群における主要古墳間の連関規制について」（『古代学研究』六〇）の見解を重視したいと思う。

(11) 白石太一郎前掲(10)論文、及び同 c「後期古墳の成立と展開」（岸俊男編『王権をめぐる戦い』（日本の古代 6）所収）。

(12) かかる「定説」をめぐる研究史については、森浩一「天皇陵考察の基礎」（同編『前方後円墳の世紀』（日本の古代 5）所収）に紹介がある。その他

三浦圭一「継体陵についての一断章」（『日本史研究』一五七 参照）。

(13) 原島礼二前掲(3)書、白石太一郎前掲(10) b 論文、同前掲(11) c 論文。

(14) 森浩一「古墳と古墳群」（『古代学研究』六）、原島礼二前掲(3)書、白石太一郎前掲(10) b 論文。

(15) 前掲(10) b 論文。

(16) 白石太一郎前掲(10) b 論文、及び同前掲(11) c 論文など。

(17) 山尾幸久前掲(2) a 書七章。

(18) なお継体即位は紀によれば五〇七年のこととされる。

(19) 管見によれば、この「斯麻」を最初に百済の武寧王に比定したのは樺本杜人「古墳時代における金石文」（『日本考古学講座』五所収）。

(20) かかる「奉」の字体そのものは先ず「寿」に読みうるものではないが、「寿」字の誤記（誤刻）の可能性もある。

(21) 前掲(2) a 書七章。

(22) 大橋信弥前掲(4)書。

(23) 吉井巖「応神天皇の周辺」（『天皇の系譜と神話』一所収）、塚口義信「継体天皇と息長氏」（『神功皇后伝説の研究』一所収）。

(24) 大橋信弥前掲(4)書。その他、川口勝康前掲(3)論文。

(25) 前掲(4)書。

(26) 息長氏の関与が天武朝であることのもう一つの論拠として、大橋氏は上田正昭「氏族系譜の成立」(『日本古代国家成立史の研究』)所収により、応神記の「若野毛二俣王系譜にみえる後裔氏族・息長氏ら意富富村王後裔氏族……筆者註と、天武八姓賜姓氏族とは、きわめて密接な対応がみられる」(前掲(4)書、九九頁)ことを主張している。これら三国君・波多君・息長君・坂田君・酒人君・山道君・筑紫之米多君・布勢君(この氏族群については後掲(35)参照)の内、筑紫之米多君・布勢君は天武八姓賜姓がなく、「きわめて密接」といってよい問題はあがあるが、この対応関係を重視するにせよ、それがかかる系譜にみられる政治的現実の反映の時期として天武朝を特定するものかどうか疑問が残る、天武朝を視野に入れたつも当然想定されるべき時代幅の問題をおさえるべきであろう。その他、大橋氏は吉井巖前掲(23)論文が開化天皇皇子の日子坐王後裔系譜(記。神功・応神に至る)に、息長氏の関与が認められ、その息長氏の作為はかかる系譜に同母系異世代婚がみられることからみて天武朝であると推定したことを援用して、息長氏伝承の定着期を確認しているが、同母系異世代婚Ⅱ天武朝作為説(吉井氏のかかる理論は笠井倭人「記系譜の成立過程について」『史林』四〇・二、に基づく)を仮定として容認したとしても、塚口義信前掲(23)論文が論じたように、かかる婚姻形態が天武朝の記編纂者の改変の所産であるとすれば、問題はまた別次元のものにならざるをえないのである。本註記については佐々木一紀氏の助言を得た。

(27) 神功皇后伝説の中で他に確実に息長氏の関与があったと考えられる要素が、九州における応神の出生後、神功が幼子をとまって大和に帰還する際に反乱を起こした忍熊皇子(紀、記・忍熊王)・麿坂皇子(紀、記・香坂王)のそれのみであることは大橋氏自身が論じている(前掲(4)書)。

(28) 従来、この三系譜は三書のあり方を比較・検討する際の絶好の材料として使われており、また息長氏伝承の混入の問題を考える上でも非常に重視されてきた。

(29) 黒沢幸三「息長氏の系譜と伝承」(『日本古代の伝承文学の研究』)所収、永井紀代子「当麻氏に関する考察」(『日本史論叢』二)、塚口義信「大帯日亮考」及び同「神功皇后伝説の形成とその意義」(ともに「神功皇后伝説の研究」)所収など。特に前二者により息長氏との関係が深い舒明の時代に王権史の編纂が行なわれた可能性が強調されていることはみのがせない。黒沢氏は舒明朝(舒明・皇極期)において「記の原型」の内に息長氏伝承が定着し、それが天武の修史に連続していくことを論じ、永井氏は当麻氏をめぐる研究の一環としてそれを継承したが他に永井氏には「蘇我氏と息長氏の修史事業」(『日本史論叢』四、がある)、但しこれらは記における多量の息長氏伝承の混入に注目するものの、記には別に「系図一卷」が備わっていたことを全く考慮していない欠点をもつことも事実である。その他、息長氏の問題とは直接関係はなく、神田秀夫氏は記の本文に古層・敏達朝前後・飛鳥層(舒明朝前後・白鳳層(元明朝)の三層が存在することを論ずるとともに、記序文にみえる「帝皇日繼」「先代旧辞」がその名称から舒明朝のものであることを断じ(『古事記の構造』、佐々木一紀氏は帝紀・旧辞の舒明朝成立説とあわせ、推古紀二十八年是歳条の修史記事が実際は舒明朝の史実に対応する記事である可能性を示している(『日本書紀』の編纂過程に関する一試論)『日本歴史』四一九)。

(30) 但し記の息長、真若、中比亮に相当する人物が、記において弟媛とは別の系譜的位置で「系図一卷」の中に載せられていた可能性もある。これらの系譜のあり方からいえば、稚野(淳)毛二派(岐)皇子の妃にそれが存在した場合であるが(安康即位前紀に二派皇子の子として忍坂大中姫命——記では大郎子の同母妹——のみ載せているが、彼女の母親の名はみえない。二派皇子から継体に至る詳細な系譜が紀の「系図一卷」に示されていることは特に菟田香融前掲(1)論文参照)、もしこのケースを想定したとしても、かかる記紀の異同自体が大橋説に対する批判としてそのまま有効であると思う。なお記では昨(代)倭長日子王の父に息長田別王倭建命の子を載せているのに対し、紀では河派仲彦以前の系譜はみえていない。これも紀の「系図一卷」には書



かれていたとみる事が可能であり(「菟田香融前掲論文」、必ずしもこのことにより息長氏伝承の欠如を考えることはできない)。

(31) 「古代宗儀の歴史的パースペクティヴ」(『増補日鮮神話伝説の研究』(三) 品彰英論文集四) 所収)。

(32) 菟田香融「皇祖大兄御名入部について」(『日本古代財政史の研究』所収)。

なお菟田氏は舒明の諡号オキナガタラシヒとロスカのタラシヒが動詞「日足す」(成長する、養育する)の名詞化された言葉「足日」であることを想定し、その諡号が「息長氏が養育したてまつた額の広い(聡明な天皇」(三七七頁)の意であることを主張している。一方、この舒明の諡号について米沢康氏は、「オキナガタラシヒとロスカには、息長真主王のオキナガ、広姫のヒロ、糠手姫皇女のヌカが全て含まれており、要するに、これに天皇のことをタラシヒコと呼んだらしい当時のならわしが加わって、その諡号ができ上っているのではないかとさえ考えられるものがある」(『継体后妃出自氏族とその伝承』「信濃」二〇―五、一三頁)と述べ、川口勝康氏もこれを継承して、「その諡号が敏達―オシサカ彦人大兄―舒明の王権直系ラインになっていたことは明らかだろう」(前掲(3)論文、一五四頁と論じている)。

(33) 大橋信弥前掲(4)書、横田健一「神功皇后の系譜について」(『日本古代神話と氏族伝承』所収)。

(34) 大橋信弥前掲(4)書、川口勝康前掲(3)論文。

(35) 記のこの個所は、実際には「意富富杵王者、三國君、波多君、息長坂君、酒人君……等之祖也」とあり、従来から混乱が想定されている。本居宣長『古事記伝』三十四之巻は「息長坂君、酒人君」を「息長君、坂田酒人君」に訂正しているが、佐伯有清『新撰姓氏録の研究』考證篇第一の成果に従い、本文の如く改めるべきであろう。

(36) 応神記にあって、若沼毛二俣王の子女の記載部分では大郎子の「亦名」として意富富杵王が記されているのに対し、息長氏をはじめとする意富富杵王の後裔氏族を註記する個所では大郎子の名は使用されていないことが大橋信弥前掲(4)書によって注目されている。大橋氏は意富富杵王の名は息長氏

によって継体の名ヲホドをもとに創出され継体との同祖を主張すべく、大郎子との同一化がはかられたことを論じている。

(37) なおこれは姉妹が「随母」とあることからみて、先に可能性ありとした紀の「系図一巻」における二派皇子妃「息長氏」の想定(前掲(30))と関連付けられるかもしれない。

(38) 山尾幸久前掲(2) a 書七章。

(39) 大橋信弥前掲(4)書は、本稿とは問題設定が異なるものの、主として①②とも関連して、「息長氏自身が自らの過去を、応神から継体の系譜の中に位置付けようとしたこと、そしてそれは、息長氏が皇親としての過去を、継体の系譜に結合させようとしたものであって、近年有力化している、継体Ⅱ息長氏出自説は、かかる息長氏の仕組んだ構想を、トレースしたものと考えるほかはないのである」(五一頁)と述べている。大橋氏の論はこの文章の限りでは全く正しいが、筆者がおさえておきたいのは、「息長氏が皇親としての過去を」、何故、他系譜ではなく「継体の系譜に結合させ」たかである。大橋氏は別個所において、「ある程度体系的にまとめられていた、系譜と物語に、二次的に架上せざるを得なかった息長氏は、この段階(天武朝修史……筆者註)でも依然、不安定な要素をもっていた継体とその父祖の所伝、あるいは神功・応神にかかわる系譜と物語に、もっぱらその関与を示さざるを得なかったと考えるのである」(二五六頁)とも論じているのが目に入るが、必ずしもその意味は明瞭ではない。

(40) 前掲(3)論文。

(41) 川口勝康前掲(3)論文はその王統譜分析の内にあって、記紀の「息長系譜のあり方は原帝紀の基本構造とその意図を示すものといえよう」(二五六頁)とも述べ、継体出自に即しての論はないが、核心はとらえているかにもみえる。

(42) なお継体の官の一つが伝承される筒城の地が、山城に進出した息長氏の拠点であること(塚口義信前掲(23)論文)も、息長氏伝承による作為の可能性が考えられなくないが、当該地は樟葉・弟国と同様に和珥氏とも有縁の地で

あつて(岸俊男「ワニ氏に関する基礎的考察」『日本古代政治史研究』所収)、今はひとまず否定しておきたい。

(43) 本稿においては応神より以前の息長氏伝承については直接論及しえなかったが、これは別稿を予定している。